

現代短歌分類辭典

津

端

亨

編

纂

江苏工业学院图书馆
藏書章

新裝判
39卷

現代短歌分類辞典

新装版 39 卷

通卷 1 9 7

平成六年五月二十五日 発行 定価 一七、四〇〇円

著者発行
兼印刷者

津 端 亨

発行所

現代短歌分類辞典刊行所

代表 津 端 亨

〒345 埼玉県北葛郡杉戸町宮前一九六一五

電話(〇四八〇)三八一〇〇四〇番

振替 東京三十一九三二一四

(ISBN 4 87706-197-5)

目次

目次

歌数	頁数	歌数	頁数	歌数	頁数
八九	一	二	三八	一	七一
なくもがな〔無くもがな〕		なされる〔為される〕			
九	三	なし〔梨〕	一四 三八	一三三	七一
なぐる〔殴る・撲る・擲る〕		なくくずし〔済し崩し〕	一 三九	一	七七
なくや〔和〕	九 四	なしだな〔梨棚〕	二 三九	八	七八
なぐわし〔名細し〕	一 四	なして	五二 三九	一	七八
なげ〔投げ〕	四 四	なしのはな〔梨の花〕	一五 四一	四七	七八
なげ〔無〕	一九二 四	なしのまにまに〔生儘生佩に〕	八八 四一	一三	七九
なげあい〔投げ合い〕	一 一〇	なしのまま	一 四四	四	八〇
なげいれる〔投げ入れる〕	二四 一〇	なじみ〔馴染み〕	一 四四	四三	八〇
なげうつ〔投げ打つ〕	一一 一〇	なじむ〔馴染む・昵む〕	八 四四	三〇	八一
なげかふ〔嘆かう〕	五一 一一	なじめり〔馴染り〕	四 四五	一	八二
なげかける〔投げ掛ける〕	一 一二	なしよなりずむ〔ナシヨナリズム〕	一 四五	一	八二
なげかむ〔嘆かむ〕	三九 一二	なしよなる〔ナシヨナル〕	二〇二 四五	一	八二
なげかゆ〔嘆かゆ〕	三八 一四	なじる〔詰る〕	二二 五一	五	八二
なげき〔嘆き・歎き〕	五四九 一五	なす〔茄子〕	六二 五一	二五二	八三
なげきす〔投げキッス〕	一 三二	なす〔生す〕	五 五三	四	九〇
なげきわぶ〔嘆き佗ぶ・歎き佗ぶ〕	一 三二	なす〔成す〕	四二〇 五三	二六	九〇
なげく〔嘆く・歎く〕	二二七 三二	なす〔為す〕	二 六五	七〇	九一
なげこみ〔投げ込み〕	五 三七	なす	一二 六五	三	九三
なげこむ〔投げ込む〕	一 三七	なす〔濟〕	一五七 六六	一	九三
なげし〔長押〕	一一 三七	なす〔那須〕	一 七一	三一	九三
なげきわぶ〔嘆佗〕	一 三八	なすこん〔茄子紺〕	一 七一	二	九四
なげぜに〔投げ銭〕	二 三八	なすざん〔那須山〕	一 七一	一二	九四
なげだす〔投げ出す〕	八 三八	なすだけ〔那須岳〕	一 七一	一八	九五
なげつける〔投げ付ける〕	一 三八	なずな〔薺〕	六 七一	七八	九五

なすの〔那須野〕	四一	九七	なちのたき〔那智の滝〕	一一	一三六	なつじかん〔夏時間〕	七	二六
なすび〔茄子〕	六	九八	なちら〔汝等〕	一	一三六	なつすいせん〔夏水仙〕	二	二六
なずむ〔泥む・滞む〕	一三九	九九	なつ〔夏〕	二三九	一三六	なつすがた〔夏姿〕	四	二六
なずらう〔準う・擬う〕	一	一〇二	なつあらし〔夏嵐〕	三	一九六	なつげみ〔夏蟬〕	八	二六
なぜ〔何故〕	五八	一〇二	なついいん〔捺印〕	一	一九六	なっせん〔捺染〕	一	二七
なぜか〔何故か〕	二一	一〇四	なつおび〔夏帯〕	三	一九六	なつぞら〔夏空〕	二四	二七
なぞ〔何ぞ〕	二	一〇五	なつがけ〔夏掛け〕	一	一九六	なつそば〔夏蕎麦〕	三	二七
なぞ〔謎〕	二九	一〇五	なつかしい〔懐かしい〕	二六	一九六	なつだいこん〔夏大根〕	五	二八
なぞへ〔傾え〕	一〇	一〇六	なつかしみこそ〔懐かしみこそ〕	一	一九七	なつつばき〔夏椿〕	三	二八
なた〔鈍〕	一四	一〇	なつかしむ〔懐かしむ〕	九	一九七	なつとう〔納豆〕	三	二八
なた〔灘・洋〕	一〇七	一〇	なつがすみ〔夏霞〕	二三	二〇〇	なつとうり〔納豆売り〕	三	二九
なだい〔名代〕	二	一三	なつかぜ〔夏風〕	三	二〇一	なっとく〔納得〕	六	二九
なだかい〔名高い〕	一	一三	なつがれ〔夏枯れ・夏涸れ〕	四	二〇一	なつどり〔夏鳥〕	七	二九
なだたる〔名立たる〕	一	一三	なつぎ〔夏着〕	二	二〇一	なつなぎ〔夏風〕	三	二九
なたね〔菜種〕	七四	一三	なつぎく〔夏菊〕	三	二〇一	なつの〔夏野〕	五	二九
なたねづゆ〔菜種梅雨〕	三	一五	なつく〔懐く〕	四	二〇二	なつのあめ〔夏の雨〕	三	二九
なたまめ〔鈍豆〕	九	一五	なつくさ〔夏草〕	三五	二〇二	なつのうみ〔夏の海〕	七	二九
なだめる〔有める〕	一	一六	なつくさのはな〔夏草花〕	一	二二一	なつのくも〔夏の雲〕	三	二九
なだらか〔なだらか〕	五七	一六	なつぐみ〔夏菜菔〕	二	二二一	なつのひ〔夏の日〕	二六	二九
なだり〔傾斜〕	三二	一七	なつぐも〔夏雲〕	七〇	二二	なつのよ〔夏の夜〕	一〇	二九
なだれ〔雪崩〕	二五	二六	なつぐものみね〔夏雲峰〕	一	二二三	なつば〔夏場〕	三	二六
なだれたり〔傾れたり〕	一	一三三	なづけ〔名付け〕	八	二三	なっぱ〔菜っ葉〕	三	二六
なだれる〔雪崩れる〕	二	一三四	なづけおや〔名付け親〕	一	二四	なつばおり〔夏羽織〕	一	二六
なち〔那智〕	三三	一三四	なつこ〔夏蚕〕	一二	二四	なつはぎ〔夏萩〕	一〇	二六
なちぐろ〔那智黒〕	二	一三五	なつこだち〔夏木立〕	二九	二四	なつばしよ〔夏場所〕	四	二六
なちさん〔那智山〕	一三	一三五	なつごろも〔夏衣〕	二三	二五	なつはな〔夏花〕	三五	二七
なちす〔ナチス〕	一四	一三五	なづさふ	四	二六	なっぱふく〔菜っ葉服〕	一	二八
なちてら〔那智寺〕	三	一三六	なつさる	一	二六	なつび〔夏日〕	六	二八

なつふく〔夏服〕	一六 二三九	ななくさ〔七草〕	三八 二六七	なにするものぞ〔何するものぞ〕	六 三三九
なつふけぐさ〔夏深草〕	三 二四〇	ななくさがゆ〔七草粥〕	二 二六八	なにすれぞ〔何為れぞ〕	二 三三九
なつふじ〔夏藤〕	一 二四〇	なけなくに〔無けなくに〕	四 二六八	なにたかき〔名に高き〕	一二 三三九
なつぶとん〔夏布団〕	二 二四〇	ななせ〔七瀬〕	一〇 二六八	なにとて〔何逆〕	四 三三九
なつぼうし〔夏帽子〕	一七 二四〇	ななたび〔七度〕	七 二六八	なになに〔何何〕	一八 三三九
なつまけ〔夏負け〕	三 二四一	ななつどうぐ〔七つ道具〕	一 二六九	なにびと〔何人〕	二〇 三三〇
なつまつり〔夏祭り〕	一 二四一	ななつのうみ〔七つの海〕	一 二六九	なにひとつ〔何一つ〕	三四 三三一
なつまかん〔夏蜜柑〕	五二 二四一	ななつほし〔七つ星〕	一〇 二六九	なにほど〔何程〕	一〇 三三一
なつむし〔夏虫〕	二九 二四二	ななひかり〔七光り〕	一 二六九	なにも〔何も〕	一六七 三三一
なつめ〔藁〕	六五 二四三	ななふしぎ〔七不思議〕	一 二六九	なにもの〔何物〕	七二 三三七
なつめ〔夏芽〕	一〇 二四五	ななへんげ〔七変化〕	一 二六九	なにやら〔何やら〕	二五 三三九
なつめく〔夏めく〕	一七 二四五	ななめ〔斜め・傾め〕	一五五 二六九	なにゆゑ〔何故〕	一〇 三四〇
なつもの〔夏物〕	一 二四六	ななよ〔七夜〕	二二 二七三	なにより〔何より〕	四五 三四三
なつやすみ〔夏休み〕	三一 二四六	なに〔何〕	四一四 二七四	なにわ〔難波・浪速・浪花〕	三七 三四四
なつやせ〔夏瘦せ〕	七 二四七	なにか〔何か〕	九七四 二八五	なにわぶし〔浪花節・難波節〕	二 三四五
なつやま〔夏山〕	一八八 二四七	なにが〔何が〕	六二 二二四	なぬし〔名主〕	二 三四六
なつゆきそう〔夏雪草〕	四 二五二	なにがし〔何某〕	四五 三三六	なのはな〔菜の花〕	三六二 三四六
なでがた〔撫で肩〕	一 二五二	なにかしら〔何か知ら〕	五 三三七	なのり〔名乗り〕	八 三五五
なでしこ〔撫子〕	一九六 二五二	なにかーと〔何かと〕	一一 三三七	なのる〔名乗る・名告る〕	四 三五六
なでる〔撫でる〕	七 二五八	なにがなしに〔何彼無しに〕	二 三三七	なは〔那覇〕	一〇 三五六
など〔等〕	一八九 二五八	なにくそ〔何糞〕	二 三三八	なびかす〔靡かす〕	一八 三五六
など	三 二六三	なにげなし〔何気無し〕	一 三三八	なびかふ〔靡〕	一 三五七
などか	三 二六三	なにごころ〔何心〕	二 三三八	なびきも〔靡藻〕	一 三五七
なとり〔名取〕	三 二六三	なにごと〔何事〕	三二六 三三八	なびく〔靡く〕	六八四 三五七
なないろ〔七色〕	三五 二六三	なにしかも	三 三三七	なびける〔靡ける〕	六三 三七五
ななえ〔七重〕	九 二六四	なにしに〔何為に〕	一 三三七	なぶきん〔ナブキン〕	一 三七六
ななお〔七尾〕	八 二六五	なにしろ〔何しろ〕	二 三三七	なふだ〔名札〕	一八 三七七
ななかまど〔七竈〕	五二 二六五	なにする〔何する〕	三五 三三八	なふたりん〔ナフタリン〕	九 三七七

なぶる〔鬪る〕	一五 三七七	なまきず〔生傷〕	一 四〇四	なまへんじ〔生返事〕	一 四二三
なべ〔鍋〕	一四一 三七八	なまぐさ〔生臭・腥〕	四七 四〇四	なまみ〔生身〕	一五 四二三
なべ	三 三八二	なまぐさい〔生臭い・腥い〕	二 四〇六	なまみず〔生水〕	四 四二四
なべかま〔鍋釜〕	五 三八二	なまくら〔鈍ら〕	八 四〇六	なまむぎむら〔生麦村〕	一 四二四
なへぎ〔苗木〕	一 三八二	なまぐり〔生栗〕	二 四〇六	なまめかし〔艶めかし〕	三 四二四
なべじり〔鍋尻〕	一 三八二	なまけもの〔怠け者〕	一二 四〇六	なまめかしさ〔艶めかしさ〕	二 四二四
なべぞこ〔鍋底〕	二 三八二	なまける〔怠ける〕	四 四〇七	なまめける〔艶めける〕	一 四二四
なべづる〔鍋鶴〕	一 三八二	なまこ〔生子・海鼠〕	一八 四〇七	なまめく〔艶めく〕	六 一四四
なべて〔並べて〕	五八三 三八二	なまごめ〔生米〕	二 四〇八	なまものしり〔生物知り〕	一 四一六
なべぶた〔鍋蓋〕	三 三九九	なまざかな〔生魚・生肴〕	五 四〇八	なまやさし〔生優〕	一 四一六
なべりょうり〔鍋料理〕	一 三九九	なまし	二 四〇八	なまよみの	一 四一六
なべに	四 四〇〇	なまし〔生〕	一 四〇八	なまり〔訛り〕	六五 四一六
なほ〔猶・尚〕	五 四〇〇	なまじ〔なまじ・なまじい〕	一四 四〇八	なまり〔鉛〕	二六 四一八
なほざり〔等閑〕	三 四〇〇	なまじっか〔なまじっか〕	一 四〇九	なまりいろ〔鉛色〕	五 四一九
なほとか〔ナホトカ〕	二 四〇〇	なまじろい〔生白い〕	二 四〇九	なまりのごとく〔鉛如〕	一 四一九
なほなほし〔直直〕	一 四〇〇	なます〔膾〕	一一 四〇九	なみ〔波・浪・濤・濤〕	一五五七 四一九
なぼり〔ナポリ〕	一六 四〇〇	なます〔鯰〕	一八 四〇九		
なぼれおん〔ナポレオン〕	五 四〇一	なまたまご〔生卵〕	一二 四一〇		
なま〔生〕	二五 四〇一	なまづめ〔生爪〕	三 四一〇		
なまあたたかい〔生暖かい〕	二 四〇二	なまなか〔生中・生半〕	二〇 四一〇		
なまいき〔生意気〕	八 四〇二	なまなまし〔生生しい〕	五 四一一		
なまえ〔名前〕	二六 四〇二	なまなまと〔生生と〕	四九 四一一		
なまおぼえ〔生覺顔〕	一 四〇三	なまにえ〔生煮え〕	一 四一二		
なまがひ〔生貝〕	二 四〇三	なまにく〔生肉〕	二 四二三		
なまがし〔生菓子〕	一 四〇三	なまぬるい〔生温い〕	二 四二三		
なまかわ〔生皮〕	二 四〇三	なまぬるし〔生温し〕	六 四二三		
なまがわき〔生乾き〕	二 四〇三	なまぼし〔生干〕	二 四二三		
なまき〔生木〕	二三 四〇四	なまびいる〔生ビール〕	二 四二三		
				計	一六〇六七 首

なくに【連語】〔続き〕

夜半の雨にぬれつつ友らはかへりたりあはれさ沁みて我れは寝なくに①

八百萬神の護れる皇軍と疑はなくなほし祈るも⑧

山なかに日ねもす雨の降るを見てわれひとり此処に居りがてなくに⑪

山中に降る雨のおと或時はこの寂しさの堪へがてなくに⑬

山中に金線草のにはへるを共に来りてあやしまなくに⑮(白き山)

山中のからくれなゐの紅葉はわが身になし言ひがてなくに⑩

山に来て我はなげけり故郷や野にも山にも言告げなくに⑥

山のうへにきらめく水はせせらぎていくにおちむ思ほえなくに②

山の上に月ヶ瀬に行く道通ず柳生の里もとほからなくに②

山の上に日は這ひのぼるごとくにてまたたく間もとどまらなくに⑩

山の根の蔭のとは花となりてありうなじ吹く風も寒からなくに③

山の湯に秋風いまだたなくにわが裸身に蟋蟀のぼる⑤

山びととなりやしぬらむ酔はなくに銀座の遠越えがてにしき⑭

山ふところより湧く白雲の一連の北に移動しつつとどまらなくに②

山路は若葉のころと行きゆけどたづさふ妻はいまをらなくに⑥

病みて臥す身をいたはるとあらなくにいたむ思の出で来るはなぞ⑬

岡山 巖

川田 順

斎藤 茂吉

斎藤 茂吉

斎藤 茂吉

今井 邦子

橋本 徳寿

中沢 庭柯

斎藤 茂吉

河杉 初子

今井 邦子

吉井 勇

広野 三郎

高田 浪吉

尾上 柴舟

病みてふすわが窓ふかく布たれて夜を寝なくに驚なくきこゆ

(新萬葉集五)

病床より見たまふ母もあらなくに庭木に水を今日もまた撒く⑦

夕風が吹きひるがへす葛の葉の煽らるるものなしと云はなくに①

夕ぐるる沼の向うにとよめきて下り啼く鴨らやすらかななくに③

夕暮の光のなかをひびき来る蛙のこゑの安らかななくに①(角川文庫)

夕さればさやぐ竹にもあらなくにおのづからなる秋の色かも

夕立を待つところにもなりにつけりさみだれ晴れてほども経なくに②

夕月の光はいまだ立たなくに波のうねりの照りはいみじき①

ゆうばえのなごりを見つつ庭に居り羊歯の青き芽まだ萌えなくに⑩

雪すでに深く到りてしづかなる日ごろとなれたのしまなくに⑥

雪空をうつろひかけも見れなくに昼焚きたつる風呂釜の音②

ゆきてわが何を希ふとあらなくに二夜ぐらゐの旅にいねたき②

ゆきなづみ君としあれば下草のぬらす露さへにくからなくに②

雪ふかき鹿野山みちの笹の葉のさやぐおもひのなしと言はなくに

雪をふきちらす山風止まなくに馬酔木の花は枯れずとどきぬ⑤

(涌井)

湯のいづみ涌く渦みゆる浅岸にのぼりし鮎は近づかななくに

温泉の中に病む足ひたし明け暮るる残る命の惜しといはなくに②

夕庭の石をながめてひとり食む蕎麦粉の味もにくからなくに⑭

田村 飛鳥

矢沢 孝子

塚田 青紀

鹿兒島 壽藏

宮 柊二

土屋 文明

明治 天皇

鹿兒島 壽藏

斎藤 茂吉

釈 迢空

寺沢 亮

鹿兒島 壽藏

中川 與一

古泉 千樞

岡 麓

寺沢 亮

藤田 とみ子

吉井 勇

よしゑやしいましと率寝て諸神の打ちきたむとも悔あらなくに

(新萬葉集四・あをぞら)

夜な夜なにわが立つてふ大き軒ひとみなはいへど我は知らなく

に①

夜なよなのわが夢かなしこの頃の思ひつめたる事を見なくに⑦

夜な夜なを早寝する身の常になく語り次ぐ茶に目をさまし居り

②

夜の更けを沼の小島はくろずめる五位鷺巢くふこゑのせなくに⑧

夜ふけまで降りやまなくに春雪のかるくあれども深々つもる⑤

喚子鳥又も呼び交ふ然れども永遠の眠ゆ君覚めなくに①

四方の山雪かも降らむ信濃路にひとしきり住まふ友あらなくに①

倚りて待つ大御いでまし御椅子のふくよかなるも安からなくに①

夜ふかし寝つかれなくに來しかたのかなしき心よみがへり來も②

よるふけて米の石をば拾ふゆゑ寝むといへども妻は寝なくに

よるふけて鶏なくにいまだ寝ず電車のおともなくなりにけり②

よろこびを分たむ妻のをらなくに独りかこちぬ祝ひの事を⑥

弱きもののちばかりにもの言ひて絶えずあるべし堪へがてなく

に

世をこそぞり歎きさがせどけふまでも一人生ききとも人のいはなく

に

夜をこめて曇のしずむ山かひに木芽はいまだとのはなくに①①

楽焼のもだしき情世の中のさかしら人に知れと云はなくに

阪口保

中村正爾

今井邦子

杉浦翠子

高田浪吉

高田浪吉

花田比露思

高田浪吉

尾上柴舟

斎藤茂吉

古泉千樫

斎藤茂吉

高田浪吉

高田浪吉

伊藤左千夫

伊藤左千夫

斎藤茂吉

伊藤左千夫

ラジオ聞く夫は声たてて笑いをり耳遠き吾はききとれなくに

(朝日短歌二)

柳笛の憂き日いかと思へればおもかげに頭ち慰まなくに④

漁士らは烏賊釣ることも出来なくに団楽しつらむ秋さめの頃

(トラビスト歌集)

留守もりて入日あかれ紙ふくろ猫に冠せんとおもほえなくに

瑠璃敷にけふも来りて何買ふとあらなくに夢のかけらのなかに④

吾が意志に逆らはなくに僅にも動きし腕はあはれといはむ

(支那事変戦地)

わが一生ゆだねむ人にあらなくに三年ひそかにわが恋ひわたる④

わが一生に作りし桶は幾千か覚えもなくにいのち古りゆく

(朝日短歌二)

わが思ひ風に吹かれて飛ぶごとし木の葉のごときものならなくに

⑩

我がおもふ人にあらなくに山茶花は一樹が枝に相隔りぬ①

若き生命かたむけしかば知らずしてありきと吾は言ひがてなくに

②

若き生命きはひ相打つ時近し松虫草の露も乾なくに(多磨三)

わが君は四谷怪談見し夜より恋ならなくに夜ごと眠らぬ⑩

若きらがたたかひ死ぬる時にして市に隠るる吾ならなくに⑤

わかぐさの妻が目かれて草枕旅にしあれば手紙も見なくに⑥

吾子が身の行くすゑかけて予め知るといはなくに悲しもよ父は

杉田明子

朝吹磯子

三木羅風

斎藤茂吉

吉植庄亮

関昌寿

古田かね子

黒田保太郎

吉井勇

長塚節

山本友一

穂積忠

吉井勇

半田良平

島木赤彦

北原白秋

わがこころ青みゆくかも夕山の木の間ひぐらし声断たなくに
わがこころいつかひらかむ風吹きて外明るきに堪へがてなくに
我が恋ふる春の丘べに新しき家居はいまだ成るといはなくに

わが性のまにまにこころうごきしをわれは涕けども悔ゆといはな
くに③

わが舌にあきたらなくに此の酒は腰よわ酒ぞ爛熱くせむ③

我が知れるひとのありとしいはなくに向ひの道を人の行く見ゆ②

わが背子が物思ひしるくつく息か霜の夜寒くねむられなくに①

わが立てる青草原に遠つ世の人かくると思はへなくに

(現代短歌大系) ①

吾がためにつどひしひとにあらなくに堂の屋根にも人ききてをり

⑤

我がために留め置く子にあらなくに何に涙するけふの首途に②

わが友の熊谷武至遠行くとひとに語りてなぐさまなくに(秋風抄)

我が涙惜しといはなくに慎しきをみなごころをただに守らむ②

わが庭にさく梅の花雪ながら折りてかざさん人もあらなくに①

わが庭に冬の陽あたる樹々のいろかくれて住まむ時にあらなくに

⑬

我が庭は 萩もあらなくにあきなる風ぞおどろかしゆく③

わが抜きて日もたたなくに根を張れる庭の雑草に迫りくものあり

④

吾が願ふ時来れりといはなくに残れる命なすこともあれや⑧

若山 牧水

高田 浪吉

湯本 禿山

岡野 直七郎

岡本 大無

杉浦 翠子

四賀 光子

豊島 逃水

今井 邦子

杉浦 翠子

松田 常憲

杉浦 翠子

正岡 子規

土岐 善磨

樋口 一葉

朝吹 磯子

土屋 文明

わが船の行手知らなくに蒼海に腹をかへしてとぶ魚の見ゆ①

我が前にけはひに立つとあらなくに一つの花の開きつつあり⑩

わが窓に昨日よりゐてあはれなりひとつ蜜蜂はや飛べなくに②

わが愛づる馬酔木の蕾のぼ出でて今日さす夕日暑からなくに

我が身にし飽く日はあれど見つつ向ふこの大空は飽くといはなく

⑩

なくもがな【連語】「無くもがな」

ないほうがよい。あらずもがな。「あの一言は―だった」「―の
差いで口」願望をあらはす助詞のついたもの。なかつてくれたら
よいがなあ」の意。モガナはガに願望の意味があり、モトナは感
歎をあらはす。又、モガ・モガモ・モガモナといひ、又、シガ・
シガモ・シガナ・シガモナともいふ。この場合シは緊張のシ、や
はりガに願望の意があり、モナは感歎である。

石ふみてあよむは苦し肉太のわがゆく道に石なくもがな

君とわれそのほかの世はなくもがな口善悪のなき世はなくもがな

③

国のため高きほまれを得し人の身をあやまたむことなくもがな①

無くもがな人憎むときこの酒を毒のたぐひに変ふる早わざ①

無くもがな世の亡ぶ日も氣のふれし母をわが子の目に映す日も

(青海波)

兵として死ねる子が墓なくもがなイルクーツクにありて悲しき②

むしろわれ思はれ人のなくもがなあまりに病めばかなしきものを

③ (現代短歌大系)

夕ぐれの外なる時のなくもがな君より外に人なくもがな

わが心いたらぬくまなくもがなこのよをてらす月のごとくに②

美禰 国樹

吉植 庄亮

堀内 通孝

土屋 文明

窪田 空穂

伊藤 左千夫

吉井 勇

明治 天皇

近江 満子

與謝野 晶子

窪田 空穂

九條 武子

堀口 大学

明治 天皇

なぐる【動詞ラ五「四」】「殴る・撲る・擲る」

①（硬い物で）強くたたく。横ざまに強く打つ。ぶんなぐる。「
げんこつで頭をーる」②風雨が横なぐりに吹きつける。

足なぐる芝生つめたき朝はれにわが肌の香を、ひとりかなしく⑨

あな淋しわがふところに身をなぐる小鳥をあな山の夕ぐれ②

洗髪束ねあげつつ昼深し青草の中に身をなぐるひと①

いまははやわれをたふる千言にも命をなぐる少女にあらず②

崖下の路雪かく人の影うごき青谷川に雪なぐるなり⑩

罵倒してなぐる古参の兵に我「ありがとうございます」と云う屈

辱に耐ゆ（兵營にて）

ひとのけんくわ、じっと見てゐればなぐるとき、ことはつてやる

静かなけんくわ（児童萬葉集）

みどり児も怒れば人を殴るなり教はりもせぬに人なぐるなり⑤

礼儀の項言へと古参兵我なぐる軍帽かぶり炊事場に入ると

なくや【句】〔和〕

ナグに疑問の助詞ヤのついたもの。なくだらうか、なくかしらむ、
の意。

山ゆかば心和ぐやと来しかどもわが胸いたしもみぢちりつつ

なぐわし【形容詞】〔名細し〕

名が美しい。よい名だ。

幾万のみ魂海彼に名細しく嶋生るる日を還りたまはぬ①

名細しき初風東風の向ふところ雲も開きて晴れゆきにけむ⑤

（訪欧飛行機）

名細しき立科山に出湯ありと都人等は今知らぬかも⑩

名細しきわがニッポン機向ふところ豊旗なびく雲ひらくべし①

なげ【名詞】〔投げ〕

なげーて（動詞ー助詞）なげーし（動詞ー助動詞）なげーむ（動
詞ー助動詞）なげーたる（動詞ー助動詞）なげーつつ（動詞ー助
詞）なげーむ（動詞ー助動詞）なげーけり（動詞ー助動詞）

ああ昨日ありとあらゆるたはむれにすべてその身を投げし君はも

（水莊記）

ああこのかの貧慾のつらの上に投げむとしたる金のわが無し⑦

あえぎあるわれに投げたるゴムシート与へくれしは誰なりしなら

む②

青淀に石を投げつつわらんべのごとくに友と春山を越ゆ

秋空に投げしパナマの明るさよ群草の北に逸れて落ちたる①

秋の空は雲でいつばいだ石を投げても雲は感じない（児童萬葉集）

秋の原千草の上に身を投げてしばしはわれを捨てし思ひす

（新万葉集七）

秋は落伍者の悲しきあきらめに流し目を投げ冷やかに去る①

明くる近し 停車場前の広っぱに ボールを投げてあそぶ中学生

③

浅き水ひかれる中をわたりきて月に投げたるわが夜網かな④

島 木 赤 彦

篠 原 志 都 児

大 村 呉 樓

吉 井 勇

土 岐 善 磨

桐 田 蔭 村

中 島 哀 浪

野 田 孝 之

長 沢 孝 道

松 山 整

萬 造 寺 齊

西 村 陽 吉

尾 上 柴 舟

浅草の池の緋鯉に鮎を投げて秋の一日を悲しみにけり①

(現代短歌大系)

朝となり刈田のあなたみづうみに椿の花を投げに来る雲①

朝の日に海に投げたる金色のリボンの端の及ぶ浴槽①

足投げて枯生の陽こそ幽けかりどうだんの芽は眼に沁み朱き②

足投げて座れる娘めづらしく物縫ひ居れば叱らずにゐる

足投げて野天に腹をふくらさうよ海苔巻沢庵又お握りに

雨まてる窓べに雨のふりて来ぬ今は身を投げやすらかにあらむ⑦

あらあらしく目を投げし意識あたしときうけとめてゐる汝の笑ま

ひは②

荒海にものうち投げて足らふなり一人の旅のまた鬱々し②

或時は日本駆逐艦はひり来て錨を投げむ珊瑚礁の湾⑩

青色に曇れる空に立つ鳩の投げたる灰の如く飛び立つ②

蒼白き光りを投げて消えにける闇のねや戸の秋のいな妻⑩

青菜の中霧降りの滄しろくかかり若きいくたりか身をば投げけり

②

伊賀の国の町寺に来て今朝の霜吾が投げし銭の音のひびかふ

生き難き命を投げし幾百も翳もちたぎる渦の変現⑤

生きし者石投げて欠けしいしぶみの低きおもてに我は面寄す④

軍の神黄金の桶を野に投げて大丈夫君を守らせたまへ①

池の鯉やしなふと人あからさまに魚のはらわたを投げて与ふる

(村野四郎)

和田山蘭

與謝野寛

高橋英子

臼井大翼

堀不二子

宇都野研

若林牧春

横田専一

田谷鋭

川田順

近藤芳美

太田水穂

中河幹子

川田順

鈴木康文

高安国世

尾上柴舟

尾関三郎

石からく投げたる水に浮びたるはかなき輪ほど白き月かな①

石投げし谷間の池に波たてりうれしきならむ遠く来りて(背振)

石投げてあさき川面におつる音ひそかなるかも子らとあそべば②

石投げて犬にほえられ泣く子どもそこへ母きて「よしよし」と言

ふ

石投げて遊びにし日も鞭とりて立てるこの日も異心なし③

石投げて占ふ一人去りゆけば又一人来て始むるらし③

石投げて静の水の面に立つ水脈の光るをみつるたなくさみし①

石投げて草に何追ふとあらなくにすてどころなき臍患を吾は

(新萬葉集七)

石投げてさびしみし日よ簾はけふも奥ふかく笹鳴りの音⑩

石投げて遠きを競ふ幼な児に我もまじりて石投げにけり(多磨四)

石投げて浜のからすとたはむる盆のやすみの船大工かな

(新萬葉集四)

石投げて深さをためす人もあれお菊の井戸に綱張られあり①

石投げて松の花粉を散らす子をかたへに見つつ海にゆく道②

石投げてみればその石の流さるる青垣淵に棲む魚ありや

石の州に碇を投げし遊船のわれらにしぶく夜雨つめたし⑤

いと弱きいましの宗にわが投げし険しき言のいかに滲みけむ③

犬猫の如くといへど生けるものを橋より水へわれら投げむや④

岩角に投げし梯子にからみあひて兵のぼりつぐか黒々として⑥

伊予沖に身を投げし若き男の遺書のとりとめなきはなにかあはれ

なり③

近江満子

中島哀浪

栗原潔子

三浦光男

尾上柴舟

吉田正俊

福田夕咲

藤永茂

木俣修

寺沢イ幸

鈴木俊三

野沢柿茸

高橋希人

加藤将之

吉野秀雄

西川百子

吉野秀雄

松田常憲

竹尾忠吉

岩の間を流るる潮に浮みゆく今投げし一かたまりの夏密柑の皮①
岩むらの段にとどろきくだる清水に青葉を投げて吾がゆらぎたり

斎藤 喜博
鹿兒島 壽藏

⑥ 魚の箱を投げたる上に雪つみていまだ降りしきる郊外の雪④

小暮 政次

うしろより投げし賽銭頭にあたり痛し痛しと叫ぶ人あり⑦

岡野 直七郎

うつくしきおよぎつかれのけだるさを砂に投げたる妹^いししのばゆ

生田 蝶介

④

海もまた港にありて抑へたる感激を投げ沖に浪立つ⑬

與謝野 寛

大わたつ海夕日の色のあかかと燃ゆる 中に身を投げてまし

柳原 白蓮

幼き日石投げ遊び受く頬の傷痕記憶の甦りきて

津端 亨

重苦くるしい感じを投げて寝しづまる電車の絶えたとある坂みち

清水 信

②

檻のなかへ餌食を投げて争はせるこんな悪戯を誰がさせるのか⑤

西村 陽吉

蔭ふかき大椎のもとに足投げて憩ひし旅のしばしのしづもり②

西村 陽吉

神橋より煙草の吸殻投げしこと悔い思ひきぬ杉並木まで(消流)

新津 亨

狽犬にゴム毬投げてひろはする人をり草の原の夕月(小笹生)

岡 麓

機銃掃射浴びたる馬か首投げてたふれたるまま真陽に照らさる

芦間 直輝

君おもふ子なれどをかし或宵は囊家に入りて賽投げしかな①

吉井 勇

君なくばかばかり胸はさわがじな国手しづかに匙を投げしとき

金子 薫園

(片われ月)

宮城の御濠の鯉に麵麴投げてたのしめるらしアメリカびとは⑤

岡野 直七郎

くちつけを投げてやるさへかなはずに朝々せりきかなしきわかれ

富田 碎花

口苦き煙草やめんとライター共路に投げ捨てふみつけにせり
靴下のゴムにくびるる脚投げて醜さをわが誰はばからぬ①

津端 亨
三木 アヤ

国の為ベンを投げ捨て銃とりて征で立つ我は学徒兵なり

津端 亨

雲とその雲が投げたる影ありて高原のひるのしづかなるかな①

富田 碎花

雲無きに裂くいかづちの音を投げわが車越ゆ十国峠⑬

與謝野 寛

くるしむ白蛾ひんぱんにそりかへり貝殻投げしごとし覺に

森岡 貞香

くろかづら投げし神話も残りゐてしづもる宮居二千年経つ②

藤原 東川

経済力持たぬ女性ら柔軟の姿体をつくりて媚を投げあふ

安田 尚義

(新萬葉集)

怪我をせし友と山道下りつつ採りにし五倍子を滝に投げたり①

山口 茂吉

五階より投げしパイプが途中より垂直になり落下してくる①

久保井 信夫

児が投げし残飯食むとおりて来し雀の動作ただに見てゐる①

君島 夜詩

子が投げし雪の跡なり本堂の扉にかたく凍みついてゐる

米田 雄郎

ここに来て投げてはならぬ生き方の臆すことばも人は知り居む⑤

近藤 芳美

(角川文庫)

心ありて少女が投げし赤き玉拾はざりしを今日にして悔ゆ

平出 修

乞食にも捨つ物あるか堂裏の藪に投げたり台風来る夕

高木 竹之助

こたつべにみな寝ころびてラジオ聞く鼻紙欲る子に投げてやりつ

竹村 寿美江

つ

此方向けと赤の椿や投げてましその彼のひとにあげの椿を②

岡本 大無

子と共に路辺の池に石投げて親しきかもよ旅に来つれば①

中井 コツフ

子供等と毬投げあそぶ丸腰の兵士を見れば顔のをさなさ

岩本 宗二郎

①

(新万葉集二)

このおもひ彼女の胸へますぐゆけポストに投げし手紙音あり①	後井 嘉一
子の投げし白きこむまり秋晴れの空に飛び行く見つつ笑ましも (新萬葉集四)	杉山 多喜子
子の投げし松毬一つゆるやかに流れて行きぬ草がくれつつ	三治多 満子
この峯が大きく投げし蔭の中におほひつまれて底ふかき溪 (山鏡)	小宮 良太郎
独楽廻し、つと投げて、手にとれば廻る、くるくるとわが心の上 に来て③	松村 英一
ゴムの葉をふるはしギター鳴り居たれ別れを絡むひとみ投げつつ	葉山 耕三郎
② こもり居の一日の暮にころぶして投げいだす足の寒からず今は⑤	半田 良平
子等と競ふ水切りの石我が投げしは水の上飛ばす汀に落ちつ①	坂井 菊枝
渾身のちからに投げし槍のひかり消えつとみればなほも飛びゐる	土岐 善磨
⑨(新萬葉集五) 座席より投げいださるる思ひしてバスの中にききほひて居けり④	半田 良平
里の子が投げし小石も秋を告ぐひとと当りて竹に鳴る時①	與謝野 寛
さびしさに椿ひろひて投げやれば波輪をなせり庭の池水①	落合 直文
三台の車のうへに武蔵野を投げつつ青し初夏の風⑬	與謝野 寛
三段の壁のひるのまぼしき潮の上に投げし瓦笥たよりなく落つ②	鹿兒島 壽藏
ジープより投げて行きたる小さき箱をかかへしばらく両手にいだく②	近藤 芳美
静かなる光を投げしステインド・グラスも炎に溶けてゆきし悲しみ④	堀内 通孝

実存の冷たき壁に身を投げて軋む歴史の鉄扉を廻せ③	大岡 博
芝の上に投げし煙草のもえさしの煙るを見つつ悲しみぞ湧く (新月)	佐佐木 信綱
しめり深き季節の窓に細はりて餌をまつ蜘蛛に花びらを投げ⑥	四賀 光子
将棋の駒を投げて眼をやる海の碧さしづかに沖を行く汽船がある ③	花岡 謙二
少年の投げし藁にも第一の笑ひを酬ゆ大象の鼻⑬	與謝野 寛
水原捕タッチ直ちに一塁に投げてあざやけきダブルプレーぞ① (現代短歌全集)	大悟法 利雄
据ゑられし一つの石に投げてくる遠穂高嶺の新雪の光⑥	四賀 光子
すがりたるザイルに力尽きたれば身を投げいだす砂の上に吾は⑩	松村 英一
過ぎざまに投げたる清きはほゑみにたまれる涙わが恥かしむ⑪	尾上 柴舟
脛よりも長き臂あげ眼翳して食ふもの投げよとゴリラの猛る③	大岡 博
スパーク！都市の圧力が電車のボールの先端にあんなグリンプスを投げて走るのだ	清水 信
すひつけて投げし燐寸の火はすぐに苔むす岩の上に消えたり (背振)	中島 哀浪
すれ違ふバスにその傍が乗れるらし投げキッスして朗らに笑ふ娘 ③	栗原 潔子
浅間の森の木暗しここはまた夏の花草火投げて並ぶ⑬	與謝野 晶子
千尺の底ひしられず沈みけむたはむれに投げし島の小石は④	九條 武子
浅間の森の木暗しここはまた夏の花草火投げて遊ぶ⑬	與謝野 晶子

その昔、小学校の柱屋根に我が投げし鞠、いかにかなりけむ①
ソファより投げたる脚の何ごとか謎のごとくに見ゆる秋の暮①
空さまに投げたる網のまひるがり水に音ありていっばいにはいる

②

大長者とあがめ来りし蔵屋敷礫を投げて人ぞののしる⑤

平なる石投げ入れて水の上とびゆくをみる友ときそいて

高き草露をこぼせば手榴弾投げたるもののある心地する⑦

卓の上に剣を投げしつはものら吾が酒杯を奪るや早飲む⑮

戦ひつつ敵艦沈みし海の上にけふは花輪を投げて帰りし②

たちあがりころあひよしと力こめ投げたる球は輪とそりにけり②

たちまちにいきどほりたる稚児の投げし茶碗は畳を飛びぬ⑥

谿川に石は投げつつしばしありいくさに行かぬわれとこそ思へ⑭

谷の底に投げし茸は岩かどにつぶれて黄なる煙をあげぬ②

月射すや投げたる網のひろがれるはかなきさまのあはれ東京⑨

月がながく投げしおのれの影にさへ心痛みき旅なりければ①

つきつぎに影を投げつつ連なるや朝日さしそふ雪のむら山

土を投げ石を投げて浅川の水は濁りぬ今日の工事に⑫

つと投げし ミーラが槍は 秋晴の 大空ぬうて 眼もはろに飛

ぶ②

鉄錆の澱める池に石投げて昼を憩ふかも少年工は③(角川文庫)

手榴弾をみな投げをへて息づくとき左肩うたれ動かずなりぬ

(支那事変戦地)

石川 啄木
富田 碎花
臼井 大翼

吉植 庄亮

津端 亨

與謝野 晶子

川田 順

森園 天涙

市山 盛雄

斎藤 茂吉

土岐 善磨

山下 陸奥

與謝野 晶子

富田 碎花

若山 牧水

松村 英一

下村 海南

木俣 修

渡辺 宇一

手榴弾手だれに投げて人の好きいつもの笑顔してかもあらむ
手榴弾川に投げ入れ浮く魚、金に換へてはあれこれと食ふ
手榴弾投げこみしままいち早く敵陣に入る土をけたてて

(支那事変戦地)

手榴弾投げつけらるるやも知れぬ微臭き路次巡察しつつ

(支那事変戦地)

手榴弾投げつつ逃ぐる敵兵がまた倒れぬ吾がうつ弾丸に

(支那事変戦地)

飛び立ちて列ひくく越えむとする鶴に隊長馬上より鞭投げにけり

(支那事変戦地)

ともすればやりどころなき怒りをば母に投げては歎きもぞする

(新萬葉集八)

投げいだせし手につたひくる冬の夜の冷たさにふと君おもひいづ

②(現代短歌大系)

投げ差ししごと石筒にひと束の小菊しづけし利休の墓に⑦

投げし石の落処見わかぬ谿下は草谷地すでに夕かけりつつ①

投げし石はそのままに泥にもぐり入る小さき山なかの沼を見下ろす③

投げし石水に波紋をつくるのみいまさらすげなくたち去りかねつ

①

投げし餌に群れて寄りくる虹ますのうろこは銀の色に光れり

投げし餌の落ちかかってくる時はやしいるか口あき躍り上れる⑤

宇都野 研
津端 亨
田畑 善兵衛

並木 茂樹

菰刈 正雄

平林 捷二

柳原 典子

前田 夕暮

宮 柊二

加藤 洵綾

高安 国世

荒木 暢夫
津端 亨
鈴木 康文

投げし錢拾ひていきぬオートバイの曲芸のあとわがこころ痛む②
 投げし麩の一つを囲みかたまり寄りおしこりおしもみ鯉の上に鯉
 (現代短歌全集・瀬の音)

武井 ひろ子
 佐佐木 信 綱

投げし本また恋ほしくて病むわれのそれへゐざると赤子に似たり
 投げしみかん一人占めするボス猿が卑しきさまをむき出しに見す

森岡 貞 香
 清水 乙 女

③
 投げ捨てし柿の実いよつややかに昼さりくれば光る庭かも③

今井 邦 子

投げ捨てし煙草の煙のただよへる秋海棠の雨に暮れゆく②

近 藤 元

投げ棄てし杖を手探る指さきもなほ語るなり深きかなしみ⑥

吉 井 勇

投げすてし林檎の皮はゆたゆたと潮の流れに流されてゆく①

大悟法 利 雄

投げられし餌に向き躍り上りたる魚体四方にしぶきを飛ばす⑤

鈴 木 康 文

投げられぬときもボールを握りゐて藤田不遇もまた美しき

丸 山 義 夫

匂ひつつ身を投げてくる女らの媚態も附つけの一部とならむ⑥

松 岡 貞 総

春の水今投げ入れし釣糸にあまた捲きよる小さき渦かな④

尾 上 柴 舟

飛行機が銀のひかりを投げて飛ぶ丘に昼来て摘む野ばらかな

竹 内 貞 子

一くれの土くれよりもわが投げてもらきいのちをつつしみてゐる

桐 田 路 村

①
 ひやひやと光を投げてかなしけれ大江のうへの秋の太陽①

富 田 碎 花

ピラ投げて捕はれて行く学生らかなしきまでに皆争はず⑤

近 藤 芳 美

昼間の事訴へて言ふ吾が声に怒を投げて夫顧みず

浅 川 志 保 子

広原のめぐりの家々青草にしろきあかりを投げて涼しろ②

森 園 天 涙

火を投げて力と力あひうちぬ今しが立つこの土のため⑨

尾 上 柴 舟

舞台より作者が投げし不思議なるこの謎解けずいかにすべけむ⑭

吉 井 勇

ふりきつて投げたる綱のおしひろこりうち沈みゆく暫くの音④

小 宮 良 太 郎

麩を投げて鯉に喜ぶ稚児を樂しと思ひ見ざるにしも非ず(平明調)

尾 山 篤 二 郎

松かさの青きをもぎて投げし海しづかに屈ぎて白帆はるけし①

藤 原 東 川

まり投げて遊べる庭にきのふ迄見えし姿はををしかりしを⑦

島 木 赤 彦

鞠投げて遊ぶを見ればオロッコもギリヤークも少年少女なり⑬

土 岐 善 磨

鞠投げて声あげ遊ぶ我子のからだ弾むごとし芝生あかるく①

五 島 茂

(現代短歌全集)

鞠投げて 独逸の俘虜は遊べども われの心は遊ぶひまなし⑤

土 岐 善 磨

毬投げて裸のをんなあそびをり青き海にむかひ投げることもある

野 村 清

①
 み社の鳥居の上に石投げてのりものらずもはかなき吾が恋①

柳 原 白 蓮

身を投げし女工いくたり釜石の水門の水激ちとどろく(水の音)

浮 田 武 子

身を投げて支へんものの無きもよし因幡の丘の沙のすり鉢⑬

與 謝 野 寛

身を投げて畳に寝たる人に似ずこの暑き日も四角なる椅子⑬

與 謝 野 寛

山駕のうちより投げし無花果の皮のゆくへよ海青みかも③

西 川 百 子

山栗鼠がみがろにかはす岩の上に投げし礫のそれでひそけし②

市 山 盛 雄

槍投げて大学生の遊ぶ見ゆ大きなかなこの楡の樹は⑦

土 岐 善 磨

わが投げし貝殻うすし青波のうねり一つはゆられて越えぬ②

山 下 陸 奥

わが投げしゴムの手毬を七つ児がいしくも打ちぬ垣を越すまで

小 杉 放 庵

(放庵歌集)

我が投げしテエブしばしば切れて飛び紙も心も友に至らず⑬

與 謝 野 寛

わが投げしにはとりのむくろいづくぞと見れども見えずくらき波間に③

わが投げし一つの石のこだまして百の音する秋風の中⑥

笑ひ居し夢つき種なく真夏日の熱き空気に投げ出すだされつ

(虚像の鳩)

われと共に小島に石を投げて遊ぶ後備大尉の子もありしかな①

輪を投げて子らが遊ぶにおぼつかな父われもとりて一つ二つ放る⑩

相馬御風	柳原白蓮	高安国世	石川啄木	北原白秋
------	------	------	------	------

なぜ【副詞】〔無〕

無。普通形容詞無シの語根ナに氣のついたもの、無いやうに、なさうに。轉じて、なほざりに、ないがしろに、なぜやりに、等の意と見てゐる。

旅なればなぜの言葉も嬉しきをねもころ君が今一夜といふ

佐々木信綱

なぜあい【動詞】〔投げ合い〕

荒き詛り投げ合いてゐる山畑に冷たき春の水汲むときも①

武川忠一

なぜいれる【動詞ラ下二】〔投げ入れる〕

投げて中に入れる。投げ込む。「かごにごみをーれる」

青草の飼秣ゆたかに投げ入れてあるじと馬と相対ひ居つ

依田秋圃

青葉さむく体重計にのぼりつつ一銭銅貨投げ入れにけり①

生田蝶介

磯川に幾たびも石を投げ入れて水門検査すみしわが友③

結城哀草果

負籠にえりまき赤き童女ゐてそばに太極投げ入れてある

前田夕暮

大甕に薪投げ入れて燃ゆる火の赤き火影に夜くだちたり①

平福百穂

なぜうつ【動詞タ五「四」】〔投げ打つ〕

①投げ捨てる。②惜しげもなく差し出す。放棄してかえりみない。
「全財産をー・つ」「身命をー・つ」

重々となひ来しごみ投げ入れて露けき草に立ちいこふかな①
 缺茶碗投げ入れてある堀の中に真菰細くのび又雨の降る②
 切りすてて海に投げ入れよ入日さす岬のはなに古き墓地あり⑤
 この中に身を投げ入れし人ありと覗き目くらむ八幡地獄①
 簾戸越しに青葉の風のすずしくて白百合匂ふ床の投げ入れ①
 そと見たる嫉みうつくし草染のひだり袂に投げ入れし神(小屬)
 平なる石投げ入れて水の上とびゆくをみる友ときそいて
 大漁をいはうて贈る祝酒樽本網となりて投げ入れにけり②
 手榴彈河に投げ入れ浮く魚とらへ金にと替ふる兵あり
 投げ入れし芥が今か焼くるらむ落葉もえつつくさき匂ひす②
 投げ入れし瑞の青木葉夜の更けて蔭静かなり文机の上に①
 夏風邪を病む我が窓に青きバナナの房投げ入れてゆきし弟①
 煮えたぎる油に餅を投げ入れて勢をつけ轆を煽る
 春の水今投げ入れし釣糸にあまた捲きよる小さき渦かな④
 湯気あがるこは飯を臼に投げ入れてつきし餅を今も念へり⑥
 淀川の河原に咲きし野薊か一本折りて投げ入れりにせり(整)
 わが暗きところを海に投げ入れむ沈みて巖となりて苔生ひむ④
 われもかう尾花を添へて投げ入れる花器は煤けしアルミ飯盆③
 女郎花瓶に投げ入れて部屋のうち身に近く秋のけはひを覚ゆ

小暮政次	斎藤茂吉	若山牧水	川浪磐根	野沢柿葺	與謝野晶子	津端亨	白井大翼	津端亨	杉浦翠子	染谷進	市川敦子	土屋文明	尾上柴舟	今井邦子	木村流二郎	若山牧水	井出一太郎	君島夜詩
------	------	------	------	------	-------	-----	------	-----	------	-----	------	------	------	------	-------	------	-------	------